

富山大学教育学部附属教育研究実践総合センター

# Center News

Center for Educational Research and Practice,  
School of Education, University of Toyama

第43号

(2023年3月15日発行)



教育フォーラム2022の様子

センターニュース第43号 目次

02	巻頭言	学部長 徳橋 曜
03	挨拶	センター長 上山 輝
04	報告	客員教授 久保 雅則 客員教授 田中 親義
05	報告	附属学校園共同研究プロジェクト
06	学園通信	附属幼稚園／附属小学校／附属中学校／附属特別支援学校
08	活動報告	学習環境研究部門 教育臨床研究部門 教育工学研究部門 環境教育部門
10	報告	内地留学を経験して
11	報告	令和4度教大協北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会 第101回国立大学教育実践研究関連センター協議会 第102回国立大学教育実践研究関連センター協議会 国立大学教育実践研究関連センター協議会Zoom情報交換会
12	業務報告	センター日誌 編集後記

## 教育行政の方向性を踏まえて

教育学部長 徳橋 曜

令和4年4月に新しい教育学部が発足して、1年近くが経ちました。本号は教育学部となってから初めてのセンターニュースとなります。人間発達科学部の2年生以上の学生たちの教育指導も並行しつつ、教員養成学部としてのカリキュラムや新しい学生指導の方法など、対応・修正していくところもあり、この教育実践総合センターの先生方には諸方面からご協力・ご尽力いただいていること、御礼申し上げます。

さて、令和4年12月に新しい中央教育審議会答申が出されました。そこでは令和3年度の答申に掲げられている「令和の日本型学校教育」を受けて、教師の学びの姿が提示されています。この答申の3つの総論『『新たな教師の学びの姿』の実現』『多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成』『教職志望者の多様化や、教師のライフサイクルの変化を踏まえた育成と、安定的な確保』は近年の教育現場の様々な課題、そして（特に3番目の方向性は）近年の教員採用試験の倍率の低さを踏まえたものでしょう。そして、これら3つの方向性に対応して「新たな教師像と教師に求められる資質能力」、「多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成」、「教員免許の在り方」、「教員養成大学・学部、教職大学院の在り方」「教師を支える環境整備」の5項目の改革が示されています。

このうち教師に求められる資質能力については、「教職に必要な素養」「学習指導」「生徒指導」「特別な配慮や支援を必要とする子供への対応」「ICTや情報・教育データの利活用」の5項目に再整理されました。単に授業の上手い先生、子どもを引きつける先生ではなく、特別支援やデータサイエンスの知識・スキルを持ち、また学級経営や子どもの理解に長けた教師が必要とされていることが、改めて示されています。同じく「質の高い教職員集団」に求められる「多様な専門性」にしても、「強みや専門性」として挙げられているのは、近年重視されている「データ活用、STEAM教育、障害児発達支援、日本語指導、心理、福祉、社会教育、語学力、グローバル感覚」といったものです。このような強みや専門性を身に付ける活動と免許取得のための通常の教育との両立のために、「四年制大学において最短2年間で必要資格が得られる特例的な開設・履修モデルの設定」までもが提案されている点については、果たしてそれで教師の質が担保できるのかという疑問を持たないでもありませんが、社会から要請されている教育課題が何であるのかを実感します。

教育実践総合センターは、こうした新しい課題を検討・追究する場として最適な機関です。教科や学校種といった枠組みにとらわれず、広い視野から教育方法を検討し、あるいは附属学校園の教員との共同研究を行いながら、富山県の教育現場に新しい風を吹き込んでいただけたらと思います。答申では、教員養成学部の在り方自体についても、理論と実践の往還を重視した教育課程への転換が求められています。まさに当センターの「教育実践」を活かす機会ではないでしょうか。同じく答申で小学校教諭免許と中学校教諭免許の併有促進が明言されていることは、2校種の免許取得を卒業要件と定めた本学部のコンセプトを後押ししてくれるものと心強い気はしますが、それゆえにこそ尚更、こうした教育行政の方向性を見据えながら、本学部ならではのより良い教員養成のあり方を考えていきたいと思えます。

今後とも当センターと教育学部・教職実践開発研究科との連携・協力をお願いいたします。

## 改善と維持と発展と – Pay it forward –

教育研究実践総合センター長 上山 輝

当センターは、令和4年度から教育学部附属教育研究実践総合センターに名称が変更になり1年を迎えます。学部の新しい授業形態や、ユニット活動など、移行期の取り組みを考えながら、今後のセンターのあり方を検討すべきタイミングであろうと認識しています。これまで、スタッフの協力もあり、教育研究実践総合センター紀要の審査プロセスのデジタル化や、教育実践につながるようなより厳格な査読プロセス、センター紀要の紙媒体の廃止などに取り組んでまいりました。今後も、改善が必要な部分については各方面との協力を得ながら実現していきたいと考えております。

一方、ここ数年においても、他大学においてはセンターの廃止、改組などの情報も入ってきます。このような状況において、当センターは引き続き学習環境研究部門、教育臨床研究部門、教育工学研究部門、環境教育部門の4部門を維持した活動を継続していくことで、独自性が高まっていると考えます。今後ともこの環境を生かした教育実践に対する貢献を果たしていきたいと考えております。

個人的な話で恐縮ですが、旧教育学部時代に富山大学に着任した私は、すぐに、三大学統合の学部内WGに入り、改革の一端を担うことになりました。また、旧教育学部から人間発達科学部になった際のセンター紀要の編集委員会の名簿の中で、現在でも富山大学に残っているのは私だけになっていました。当時のことを思い出しても、目の回るような忙しさがよみがえってきますが、周りの協力を得ながらなんとか乗り切り、今につながっているのだと実感しているところです。現在も共同教員養成課程への改組にあたり、さまざまな変更が行われていますが、学部が変わり、学部を構成する教員も少なくなっていく中、関係機関の教員と研究者が、研究実践に腰を据えて取り組む環境を整えることは、なおいっそう重要なことではないかと考えております。懸命な努力を重ねている教員・研究者をサポートするべく、協力できる体制を整えられればと考えています。

変えるところ、変わらないところ、発展させていくところを積極的に見極め、センターとしての取り組みを継続したいと考えております。今後ともご支援、ご協力をお願いいたします。

## 学校と大学をつなぐ「教育フォーラム2022」

### 「語ろう これからの教育、未来の学校」教育や学校の在り方について考える

センター客員教授 久保 雅則

11月19日に、「教育フォーラム2022」を開催しました。これは学校と大学が連携して、教育実践と教育研究の融合を図り、教師と研究者による協同の学びを推進するという目的で行っています。毎月の学習会を発展させて年に1回開催しており、今年で7回目を迎えました。

参加者は、来年度から教員になる学生や、教職大学院生、小、中、高校の教員、大学教員や教育機関、行政関係者、一般の方等、オンラインも含め46名の参加で、様々な立場から教育を考える機会となりました。

今年は、4人の方の提言の後にこれからの教育、未来の学校について、参加者で語り合うことを中心に進めました。グループ協議Ⅰでは、提言者を囲んで提言内容を深め、グループ協議Ⅱは、様々な立場の方でグループを作り、協議Ⅰをもとに、今の学校と教育の課題や今後の在り方について話し合いながら自分の提言をする時間としました。

〈提言内容〉

- ①「子供の学びについて考える～コロナ禍とギガスクール構想の下で」(小林憲司先生 八尾小)
- ②「学校は何のために、誰のためにあるのか～教員の言動を内省してみよう」(中川邦章先生 石動中)
- ③「教育改革は誰のため、何のため」(林 誠一先生 富大、元砺波高)
- ④「公立学校の役割、富山県の教育について、今後の学校への提案」(竹添英文氏 氷見市役所)

教育や学校の在り方は根幹的な問題ですが、現場では話す機会がなく、参加者は多様な立場の人との対話の中で、新鮮さを感じながら自分と向き合い、考えが広まり深まっていくのを感じられたようです。



## 心の解放と交流を図る

センター客員教授 田中 親義

心のエネルギーを消耗させた子どもたちの中には、自分の殻に閉じこもって集団の中へ入れなかったり思いを素直に言葉にできなかったりすることがよく見受けられます。かつて「適応指導教室」で不登校の子どもたちと関わった時期に、こちらが何を問いかけても「別に!」という返答しかなく、会話が成り立たない小学生男児がいました。そこで、「オセロゲームをしながら会話の糸口を探る」ことにしたのですが、彼のゲームへの関心は高く「たいそう上手」だったのです。次々に繰り出す妙手にびっくりし、盤面が彼の色に染まっていくのを大いにたたえながら「君は強すぎるから、左手でやってくれないかな?」と冗談を言った時、「それ、意味ないと思うよ!」とにっこり微笑んだのです。ゲームをしながらの「ながら会話」が効果を発揮し、相手の「心が解放された」手ごたえを感じた瞬間でした。その後はほかのゲームも一緒にやりながら、少しずつ会話が成り立つようになったのを覚えています。



このような「相手との関係づくり」の良さに気付いてもらえるよう、内地留学の先生方には「心理解放のためのゲーム」や「心の交流を図る軽スポーツ」を体験してもらう機会を設けています。将棋やオセロ、ジェンガや人生ゲーム、そしてトランプなども含めた各種のゲーム。フリスビーやバドミントン・卓球、ミニソフトテニスやビーチボールなどの軽スポーツ。どちらも最初は二人で、次に3~4人で、やがてはグループでという進め方が、うまくなじんでいける秘訣のようです。「こんなことでも結構楽しいね!」「やっているうちに自然と声が出たり笑顔になったりするね!」という先生方の自然な発言が、これらがもたらす効果をしつかりと表しているように感じます。

## 富山大学教育学部・附属学校園共同研究プロジェクト活動紹介

このプロジェクトは、大学の教員と附属学校園の教員が自主参加を原則として、教育実践の向上につながる共同研究、子どもたちの成長につながる共同研究を行うものです。本年度、このプロジェクトは12のグループ、のべ109名により進められました。その活動の一部を紹介します。

### 【ICTの教育利用研究グループ 附属小学校 岩山直樹教諭の実践】

ICT活用に着目すると、慣れる段階から、効果的に活用する段階へと移ってきた。そこで、「効果的にICTを活用することによって、資質・能力を発揮することができるようになる」という資質・能力ベースの視点と、本校の研究主題「学び続ける子供が育つ授業の創造」という視点を関連させ、効果的な活用を以下のように整理した。

- ①主体的に問題解決を進めることができる活用
- ②自分の考えに自信をもつことができる活用
- ③学習の進め方を自己調整できる活用

本年度は、この活用に着目して年間を通して授業実践に取り組んだ。以下、第4学年社会科「銅器をつくるまち高岡市」（2023年1月実施）の実践を基に、活用の在り方と、ここでのポイントを紹介する。（紙幅の都合上①の活用のみ紹介する）

#### 活用アプリ Googleスライド（PowerPoint、Keynoteでも応用可能）

友達と学習問題「高岡市ではどのようにして銅器づくりを守り伝えているのだろう」をつくったA児は、右のような仮説を立てた。

A児のように一人一人のこだわりや興味関心によって問題意識に差が出てくる。そこで、教師は多様な学び方（見学、インタビュー、資料活用、インターネット等）を提示したり既習から引き出したりして、子供が互いの違いを認め合いながら、学び方を自己選択・決定できるようにした。

そうすることで、A児は自分なりの学習計画を立て、解決の見通しをもって、学習対象に関わり始めることができた。

このように、問題解決的な学習の過程では、「計画力」を発揮しながら、自分の学習計画を立てる活動においてICTを活用することができる。この時の、次のことがポイントとなる。

- ・子供は、問題意識が同じ友達と協働して学習計画を立ててもよいこと
- ・子供は、教科書や既習の学習ログを参考にしてもよいこと
- ・子供は、学習を進めるにあたって、学習計画を修正してよいこと
- ・子供も教師もモデルにこだわらず、自分らしい学習計画を立てること（まねすることも容認する）
- ・教師は、子供の思いや願いを引き出すために、十分な時間を確保すること
- ・教師は、実態に応じて多様な学び方を提示したり、全体での活動（見学、実験、話し合い、発表会等）を整えたりすること

#### 〈葉の思いや願い〉

私は、おわら風の盆の学習と同じように、銅器を作る人が少なくなっていると思うので、高岡銅器を県外にも広めて、銅器が作られる人を増やしていると思う。

#### 〈葉の仮説〉

- ・型を作って、その中に土を入れて固める作り方に違いない。
- ・昔のものに最新の技術を追加した銅器を作っているに違いない。
- ・全国の人に向けて広告で高岡銅器を広めているに違いない。

〈学習問題〉  
高岡市ではどのようにして銅器づくりを守り伝えているのだろう

番号	学習計画	調べ方	目当て
1	高岡銅器はどのようにして、作られているのだろう	インターネット パンフレット	銅器の作り方を学んで、なぜ、高岡でたくさん銅器を作っているのかを理解する。
2	高岡銅器はどのようにして、守られているのだろう	銅器づくりをしている人に聞く	銅器づくりの作り方を理解する。
3	高岡銅器はどのようにして、伝えられているのだろう	銅器づくりをしている人に聞く	銅器づくりの伝え方を学んで理解する。

【A児の仮説（上図）と、学習計画（下図）】

ICTを効果的に活用することで、子供は「計画力」を発揮しながら一つ一つの学習活動に子供が意味を見出せるようになり、学習の方向や見通しをもちながら、主体的に問題解決を進めることができるようになる。

## 附属幼稚園から

附属幼稚園 陽 弥生

本園では、今年度より「豊かな感性と表現する力を育む—もの、人、こととの関わりの中で—」という研究主題で研究を進めてきました。今年度は、子供の話している言葉や体の動き、素材となるもの等を仲立ちとした表現に重点を置き、子供の豊かな感性と表現する姿を捉えました。そこから、子供がどのようなことを感じているのか、その背景にある心を動かす出来事とは何か、どのような「もの」「人」「こと」との関わりがあったのかを探りました。

研究の成果として、表現する子供の姿の背景には大きく「教師の援助」、「友達との関わり」、「その他」（偶然出会ったもの、起こった出来事や現象等）の3つがあり、それらが子供の心を動かす要因となっていることが明らかになりました。また、記録を基に学年や時期ごとの「表現する子供の姿」についてもまとめることができました。これらの成果は令和5年6月に開催する保育フォーラムにおいて報告いたします。

令和4年度は6月16日（木）に、オンラインと参観の両方で保育フォーラムを開催しました。県内外から多くの方に参加していただき、共に学ぶ機会をもつことができました。また、名古屋学芸大学ヒューマンケア学部 教授・学科長 津金美智子先生にご講演をいただきました。富山大学の先生方には、実際の保育を見ていただき、専門的な立場でご意見やご助言をいただきました。来年度も附属幼稚園の研究にご指導とご協力をお願いいたします。

## 附属小学校から

附属小学校 土合 真祐

本校では、令和2年度より「学び続ける子供が育つ授業の創造—対話に着目して—」を研究主題に掲げ、4年計画で研究を進めています。研究3年度の本年度は、「子供自ら問いを解決するための教師の手立てを明らかにする」を副題に、令和4年10月より研究授業を重ねてきました。主な成果は以下のとおりです。

- 子供が問いをつくった後、その解決に向けての方法（仮説）を話し合う際は、既習を想起したり、互いの考えのよさを十分に理解しながら聞き合ったりする場を設定することで、子供は問いを解決するために用いる「解決の視点」を見出すことができる。
- 「解決の視点」から、再び学習対象とじっくりと関わる場を確保することで、子供は自分の考えに見直しをかけながら、その子供らしい仮説検証を行っていく。
- 見直しをかけた自分の考えを表現し合う場を設定することで、子供は考えを再構築し、一人一人が納得して問いを解決していく。

対話は、子供が必要感をもって仲間との関わりを求めていくことから始まります。授業の中で、子供が「この問題を解決するためには、仲間との関わりが必要だ」という気持ちになることが重要であると実践を通して感じています。

来年度の研究発表会（6月9日予定）では、白水始先生（国立教育政策研究所初等中等教育研究部総括研究官）の講演を予定しています。今後の研究にご示唆をいただき、次年度の研究に生かしていきたいと考えています。今後とも、附属小学校の研究にご指導ご協力をよろしく申し上げます。

## 附属中学校から

---

附属中学校 飯島 悠一

本校では、研究主題「主体性の高まりをめざす課題学習」の下、令和2年度より副題「『見方・考え方』を働かせ、『深い学び』を実現する授業づくり」を掲げて研究を進めています。現在掲げる研究の重点は次のとおりです。

- 1 「深い学び」を実現する単元構成
- 2 「見方・考え方」を働かせる問い

以上を踏まえ、目指す「深い学び」を明確にした上で、学習課題をはじめとする「見方・考え方」を働かせる問いの連鎖によって単元を構成するという共通認識の下、2年間研究を進めてきました。また、単元ごとに学びを深めると同時に、前後の単元との連続性が重要であることもわかってきました。そこで3年次は、その連続性において鍵となる「学習評価」に着目することとしました。とりわけ、本校の研究主題との関連が深く、教育現場において難しさを感じる先生方が多い「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、校内研修を行いながら研究を進めました。主体性の高まりをどのような方法で評価するか、単元のどの時期に評価を行うべきか、振り返り活動における問いはどうあるべきか、容易に解決を見ない課題が多くある分野ですが、「形成的評価」と「総括的評価」を意図的に使い分けることの重要性や、パフォーマンス評価のもつ可能性と汎用性等について共通理解が進んでいます。

新たな時代を生きる子供たちには、他と協働しながらも主体性をもって活動することがますます必要になるだろうと思われます。来年度の教育研究協議会（6月8日予定）では、上記の内容を踏まえた3年次の研究成果を発表いたします。多くの先生方にご参会いただき、忌憚のないご意見を拝受したいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

## 附属特別支援学校から

---

附属特別支援学校 本田 智寛

今年度は「子供の主体的な学びを実現する授業づくり～単元構成の工夫と教員同士の聴き合いの充実」を研究テーマに実践を行いました。本校では、「学習の過程で子供が何かに気付いたり、自ら行動を変えたりする姿」を子供が主体的に考えている姿と定義し、その中にこそ子供の主体的な学びがあると考えます。授業の中で子供が主体的に考え、目標達成に向かう主体的な学びを実現するための授業づくりをより進めるために、今年度は特に二つのことを重点に実践を進めました。

一つ目は「単元構成の工夫」です。本校では昨年度、「子供が考えるための単元構成イメージ」を作成し、単元や授業の中で子供がこれまでの学習を生かして自ら考えを深めていくための七つのステップを示しました。今年度はこれら「単元構成イメージ」の内容を、授業づくりに用いる個別の指導計画やブリーフィングシートに明記することで、単元や授業の中に子供が考える機会を意図的に設定できるようにしました。

二つ目は「教員同士の聴き合いの充実」です。聴き合いのプロセスを示した二つのフォームを作成し、それに沿って聴き合いを進めることで、授業の中の子供の姿の事実について十分に聴き合い、今の子供の実態や授業の目標の達成度を確認してから、次への願いや具体的な授業改善の手立ての検討へと進んで行けるようにしました。

今年度の成果は、令和5年1月から2月に、公開教育研究会としてオンデマンドで配信し、参加者によるアンケート結果から多くの示唆を得ることができました。成果と課題を生かして更なる研究実践を進め、来年度も公開教育研究会で発表させていただきます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

### 学習環境研究部門

センター准教授 長谷川春生

学習環境研究部門では、昨年度に引き続き、富山大学ICT・DS教育支援事業の1つであるオンラインセミナーの運営を行いました。第1回目は6月30日（木）に、茨城大学准教授小林祐紀氏から「1人1台端末の活用を通じて授業改善を実現するために」というテーマで講演をしていただきました。1人1台端末の活用は、「とにかく使ってみる」の段階から、「探究的な学習を進める上での活用」の段階となっていることの解説とともに、明日からの授業のヒントやポイントも教えていただきました。第2回目は、11月29日（火）、新潟市教育委員会副参事・指導主事の片山敏郎氏から「ICTを活用したこれからの教育」というテーマで講演をしていただきました。先進的な取組を続ける新潟市教育委員会のGIGAスクールの今までの取組と今後の方向を解説していただきました。各学校はもちろん、教育委員会の取組の重要性がよく分かりました。第3回目は、2月27日（月）に、未来教育デザイン/情報通信総合研究所特別研究員の平井聡一郎氏から「学校DXのためにまず取り組むべきことは何か」というテーマで講演をしていただきました。小中学校での校長等のご経験、教育委員会での指導課長等のご経験も基に、学校DXをどのように進めていけばよいかについて具体的に示していただきました。

本部門で、3カ月間の内地留学をされた先生方の成果は、2月19日（日）に開催された北陸三県教育工学研究会（富山大会）で発表していただきました。入善町立黒東小学校の古田香織先生の発表題目は「個別最適な学びと協働的な学びを実現するための授業改善—1人1台端末を活用した算数科単元内自由進度学習の実践を通して—」、朝日町立朝日中学校の山田智徳先生の発表題目は、「中学校数学における個別最適な学びに向けた動画教材開発とその活用」でした。どちらもICTを活用した実践であり、教育現場の参考になるものでした。

### 教育臨床研究部門

センター准教授 石津憲一郎

センター講師 近藤 龍彰

教育臨床部門では、現在2名体制で部門運営を行っています。今年度も例年通り、富山県教育委員会との共同事業、また各県内の教育センターから派遣される内地留学の先生の受け入れを行いました。R4年度は前期・後期合わせて8名の先生方が研修を行いました。研修のテーマとしては「チームにおける学校教育相談の進め方」や「自律性に着目した教育相談の実際」などがありましたが、いずれもこれまでの教育経験を振り返るとともに、現場に活用できる知見や視点を修得していったもらったものと思われます。なお、本事業の一部は教員カウンセラー（富山県カウンセリング指導員）育成事業の一環として行われており、現場への臨床心理的知識の普及にも貢献しています。

定期的に行われている教育臨床部門の研修会は、新型コロナウイルスの感染拡大の懸念もあり、今年度は開催できませんでした。ただし小規模なものとしては、「教育臨床研究会」および「教育心理学勉強会」を開催しました。「教育臨床研究会」では、過去の内地留学生と教職大学院の「学びの継続の一環」をテーマに、約25名程度の参加者の中で理論と実践の往還を続けています（今年度はすべてハイブリッド開催として行いました）。

「教育心理学勉強会」では、現職の先生方と学生が10名程度集まり（Zoom等を活用）、教育心理学関連の知見について学び合いました。今年度は、2022年5月28日に斉藤淳（著）『ほんとうに頭がよくなる世界最高の子ども英語わが子の語学力のために親ができること全て』、7月30日に魚住絹代（著）『子どもの問題いかに解決するか いじめ、不登校、発達障害、非行』、9月24日に鹿毛雅治（著）『モチベーションの心理学 「やる気」と「意欲」のメカニズム』、12月17日にイーストウッド&ダンカート（著）『退屈の心理学 人生を好転させる退屈学』、2023年3月18日に文部科学省『生徒指導提要（改訂版）』、といった書籍を取り上げて、参加者で議論しました。

今後もこのような状況が続くことも想定されることから、どのような形の研修会が可能かを模索していき、地域の教育現場に対して有益な情報発信を続けていきたいと思っております。



## 教育工学研究部門

---

センター講師 小澤 郁美

教育工学部門では、学生や地域の教育関係者を交えた研究会（明日の学校を創る研究会）を定期的に行っています。今年度は、「フィンランドの教育」「デジタル教材」「オンライン授業」などをテーマに、毎回10名程度の参加者で討議を行いました。また、研究会の公開講座として「教育フォーラム2022」を令和4年11月19日に実施いたしました。

他にも、地域の児童生徒の学習改善を目指した活動として、県内の公立高校を訪問し、「教育心理学の知見を踏まえた効果的な勉強方法」と題した講演を行いました。講演では、心理学の知見に基づいた効果的な学習方法を体験的に学んでいただきました。参加者からは、「勉強のやり方についてずっと悩んでいたのに、効果的な方法を知れてよかった。」「今まで学習していた方法を改めて考え直すきっかけになったり、新たに関連付ける、理由を理解するなどのやり方を学ぶことができ、今後の受験勉強や学習に生かすことができそうだった。」「非常にわかりやすい説明で、実際に自分で体験した感覚を参考にできたことで、講義への理解が深まった。」といったご感想をいただきました。

今後も研究会や講演等を通して、地域の教育に貢献していきたいと考えています。

## 環境教育部門

---

センター教授 高橋 満彦

技術専門職員 増山 照夫

令和4年度より、西田地方の農場実習地の供用が廃止され、寺町の自然観察実習センターに活動の場が移った。

このため、増山協力員の支援も得て、西田地方の終活と、寺町への移転に東奔西走する日々であった。結局、西田地方の入札は不調で、建物もまだ残っているが、西田地方の圃場をいつまでも利用はしておられず、さりとて、寺町には圃場はあっても農機具を納める建屋が不足している。そのため、学部事務とも相談し、種々支援をいただき、大型物置の購入、カーポートの設置など、設備改善に取り組んだ。しかし、実習等の授業も行われるプレハブ管理棟は、老朽化が進んでいるにもかかわらず、改築の予算はつかず、かろうじて空調設備を導入したのみであった。

また、管理のための人的資源も、最低限の予算での外部委託となり、ボランティアの御奉仕に益々頼っている。

このような状況下でも、農場実習（「栽培技術実習」）は、13名の学生を迎えてにぎやかに実施された。人間発達科学部の人気科目である。教育学部になってどのような展開ができるか、悩ましいところである。

農場実習の他、地学教室の骨格標本作成の支援、新しい教育学部の野外実習の支援など、細々とした仕事もお手伝いをし、他では得られないサービスに満足をしていただいた。活動の継続へのインセンティブにしていきたい。

また、野生動物問題の研究活動は、今年度から科研費基盤研究B（「鳥獣保護管理の現代的課題に適應した人と場の制度再構築：全国の猟師達と考える処方箋」代表者高橋満彦）の獲得もあり、ますます励みたいところである。学生実習の中でも、富山市山田地区の防獣柵管理のお手伝いなど、農事教育と野生動物教育の接点も追求している。

いずれにしても、本部門の活動は、予算と資源の必要となるものであるもので、引き続きご支援をお願いする所存である。

## 内地留学を経験して

射水市立太閤山小学校 新川 拓生

前回の内地留学ではカウンセリングの技法を用いて相手の感じている世界を教えてもらい、子供自らのリソースを生かせるようにフィードバックし成長を促す関わり方を学びました。あれから4年の歳月を経て、幸いなことにもう一度内地留学の機会をいただきました。日々の教育活動の中で疑問に感じていた「現代の子供観」「生徒指導」「教育相談」「教育課程の変遷における指導内容の吟味」「チームによる共同作業を行う際の各教師の心構え」等について、講義や文献研究、ゼミで内地留学生との意見交換をするなどして、課題を精緻化できつつあります。自分の経験や勘、思い込み、価値観だけに偏ることなく、理論と実践を結び付けながら学び続け、実態に合わせて柔軟に対応することが子供への理解と適切な指導や支援につながると改めて感じています。そして、石津先生をはじめ現職の内地留学生、研究室の学生との学び合いやつながりが自らの成長と心の安定につながるかけがえのない時間となっています。この学びを現場に戻ったときに還元できるようにしていきます。

小矢部市立大谷中学校 中田 雅也

中学校の教員になってはじめて半年間学校を離れることになりました。最初に同じ内地留学生の先生方と、これまでの生徒への対応で後悔していることを振り返る機会がありました。その際、もっとうまくできたのではないかと思える対応があり、この内地留学を通して適切な生徒対応を学びたいと思いました。大学での講義は、発達段階に応じた指導・支援の在り方、特別に支援が必要な生徒への対応、カウンセリングの在り方等、現場に直結するものばかりでした。講義を受けながらまだまだ自分の知識が足りていないことを痛感し、今後も学び続け、確かな理論に基づく生徒対応の必要性を感じました。また、今回ゼミの仲間や先生方との学び合いを通して、自分の視点の広がりやチームで対応する大切さを改めて実感しました。これからも現場で起こる様々な問題に一人に対応するのではなく、学校職員が一つのチームとなり、生徒一人一人に寄り添う支援を心掛けたいと思います。

上市町立上市中学校 早川 健人

学校現場にいるときは業務に追われ、毎日があっという間に過ぎ去っていくようでした。充実してはいるものの、「これでいいのだろうか？」という悩みに対して、じっくりと振り返る余裕がなかったようにも感じます。そんな折、内地留学という機会をいただきました。講義や演習等を通して新たな知識を得る中で、これまで関わってきた生徒のことを思い返し、腑に落ちることが多くありました。今一度、立ち止まって考えることで、これまで感覚で実践してきたことと理論や知識が繋がったり、生徒一人一人に対する支援の在り方について、再度、考え直したりすることができたように思います。また、指導に当たってくださった先生方からの学びや、同じ内地留学生の先生方との学び合いの中で見識を広めるだけでなく、人の和が重要であることを実感しました。「自分で何とかしなければ」と考えるのではなく、チームで事に当たる大切さを改めて感じています。現場に戻っても、理論・知識に基づいた指導や人の和を大切に、生徒に寄り添える教員でありたいと思います。

## 令和4年度教大協北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会報告

---

近藤 龍彰

令和5年2月15日（水）にZoomで北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会が開催された。上越教育大学と富山大学の参加があった。富山大学からは、石津、小澤、近藤、高橋、長谷川が参加した。「コロナ禍における教育実習の対応」や「今後実践センターに求められる役割」について情報交換を行った。また、今後も継続的に協議会を開催していく方針が確認された。

## 第101回国立大学実践研究関連センター協議会報告

---

小澤 郁美

令和4年9月9日（金）にZoomでセンター協議会が開催された。富山大学からは、上山センター長、石津、小澤が参加した。まず、2021年度会計報告・監査報告、2022年度予算案などが承認された。その後、各大学よりセンターの活動紹介が行われた。富山大学からは上山センター長が活動紹介を行い、今年度より教育学部附属となり名称が変わったことや、4部門体制の紹介などを行った。

## 第102回国立大学実践研究関連センター協議会報告

---

近藤 龍彰

令和5年2月28日（火）にZoomでセンター協議会が開催された。残念ながら、日程の関係上、富山大学からは出席者はいなかったが、資料の方を共有しながら今後も継続的に活動を行っていく。

## 国立大学教育実践研究関連センター協議会Zoom情報交換会

---

近藤 龍彰

令和5年2月2日（木）にZoomにてセンター協議会Zoom情報交換会が実施された。富山大学からは、近藤が参加した。最初に、今回の情報交換会の趣旨について説明がなされた。富山大学からは近藤が活動紹介を行い、各大学のセンターの情報交換を行った。残念ながら途中退室となったが、今後も継続的に実施される予定であるということから、インフォーマルな情報交換の場として、継続的に活用していきたいと思う。

# 業務報告

---

## センター日誌 令和4年度の実践総合センターの主な行事

令和4年（2022）

- 6月27日 第1回センター運営委員会議・第1回センター紀要編集委員会
- 9月5日 第2回センター紀要編集委員会
- 9月8日 第101回国立大学教育実践研究関連センター協議会（東京学芸大学（Zoom））
- 11月18日 第3回センター紀要編集委員会
- 11月19日 教育フォーラム2022

令和5年（2023）

- 2月2日 国立大学教育実践研究関連センター協議会Zoom情報交換会
  - 2月15日 日本教育大学協会北陸地区会教育実践研究指導部門研究協議会（富山大学（Zoom））
  - 2月28日 第102回国立大学教育実践研究関連センター協議会（東京学芸大学（Zoom））
- 

## 編 集 後 記

今年度も、多くの方々のご協力により、センターニュースの43号をお届けできることとなりました。

令和4年度から、人間発達科学部が教育学部に改組となり、センターの名称も変更となりました。組織体制そのものは大きくは変化していないものの、担うべき役割については、今後変わっていくかもしれません。時代が要請するセンターとしての機能を十全に果たしていくために何が必要であるのか、実践センターとしてもしっかりと検討し、情報発信していく必要があると言えます。

印 刷	令和5年3月10日
発 行	令和5年3月15日
編集発行	富山大学教育学部附属教育実践総合センター 代表者 上山 輝 〒930-8555 富山市五福3190 ☎076-445-6380